

カトリック両王とザクロの図像学 ——象徴としての「ザクロ」と「グラナダ王国」のあいだで——

立石 博 高

要旨

本稿は、近世スペイン初めのカトリック両王が自身の紋章にザクロ（グラナダ）を組み入れた歴史的背景とその意図を考察するものである。従来、この図像は1492年のグラナダ王国併合によるレコンキスタ完了の証（あかし）と理解されてきた。しかし、中世から近世初頭におけるザクロの図像学的意味はより多層的であった。まず、16世紀の著作における図像解釈から、ザクロが理想的な王権の統治技法を象徴していたことを明らかにする。さらに、聖母マリア信仰との連関において、異教・異端に対するキリスト教の勝利を意味していたことを確認する。その上で、両王の共通の出自であるトラスタマラ家が、それ以前から王権称揚のためにザクロの図像を巧みに活用していた事実を解明する。以上の検討を踏まえ、カトリック両王におけるザクロの紋章は、単なるグラナダ併合という政治的成果の誇示にとどまらず、王朝国家としての正統性を表徴する多面的な政治的機能を有していたと結論付ける。

[キーワード]

カトリック両王, ザクロの図像学, グラナダ王国, トラスタマラ朝の記章, 統治技法の象徴

はじめに——象徴としてのザクロ

古代から中世・近世にかけて、ザクロ（柘榴）は様々な象徴的意味を帯びてきた⁽¹⁾。その形態からして多産と豊穡のシンボルとされてきたことは言うまでもないが、とくにキリスト教美術に関わるものとしては、内部に多くの種子をつけることから多くの信徒たちを統合する教会を表すものとされてきた。さらに永遠の生命と復活（*resurrección*）のシンボルともされた。さらに中世後期には旧約聖書の「雅歌」4章、12-13に語られる「最上の実をみのらすザクロの園」に因んで、聖母マリアの清純さ（*castidad*）のシンボルとされた。同時に幼子イエスがザクロを握るときには、イエスの受難と復活を象徴するものとされた。フラ・アンジェリコ、フラ・フィリッポ・リッピをはじめとする15世紀のマリアとイエスを描いた聖母子像では、母と幼子の二人の手でザクロを握っている描写が多々見られるのである。

聖母マリア崇敬の高まりをみせたスペインでは、同様の構図の絵画とともに礼拝堂を飾る琺瑯引きテラコッタの像もつくられていた。有名な作品の一つがセビーリヤ大聖堂スカラス礼拝堂にのこるアンドレア・デッラ・ロbbiea（1435-1525）の手になる「ザクロの聖母（*Virgen de la Granada*）」像（【図1】を参照）である⁽²⁾。

【図1】



ここで注意したいのは、中世スペインにおいてザクロの聖母、そしてザクロの果実の表徴が、イスラーム勢力に対するレコンキスタ（再征服、国土回復運動とも）の進展と絡んで、別の意味を帯びるようになったことである。一つには、レコンキスタを進める王侯貴族の偉業を庇護するパトロンとして聖母マリアが立ち現れるという伝承であり、そのことについては第2章で論じたい。二つには、ザクロは教会的な意味とは別に、統治技法の象徴として使われるようになり、とくにカステイーリャのトラスタマラ朝のエンリケ4世（在位、1454-74）の記章（*divisa*）として描かれていることである。そして異母妹のイサベル1世（在位、1474-1504）も、もとはやはりトラスタマラ家であるイサベルの夫アラゴン王フェルナンド2世（在位、1474-1516）も、この伝統を継承していることが確認される。スペイン国民史学の通説では看過されているこの問題は第3章と第4章であつかう。三つには、1492年に陥落したナスル朝グラナダ王国の「グラナダ（*Granada*）」がザクロと同じ言葉（偶然にも）であるところから、イサベルとフェルナンド（カトリック両王）の国王紋章の盾下部に描かれているザクロを、単純にグラナダ王国（最後のイスラーム勢力の支配領域）の象徴と理解していることの問題性である。これは第4章の後半と「おわりに」の部分で扱いたい⁽³⁾。

カトリック両王の紋章の図柄は、本稿のかなめとなるものなので、【図2】として、1497年の金貨

(Excelente) を先ずはあげておきたい。諸王国の紋章を集めた盾の下部にザクロが大きく描かれており、繰り返すが、カスティーリャ王国に併合されたグラナダ王国を象徴するものと説明されてきたのである。ちなみに現在の国章の図柄にもこのザクロ＝グラナダ王国は描かれている⁽⁴⁾。

【図2】



さて、こうした議論を進めていくうえでの出発点となるのは、ほぼ同時代的な図像学的解釈であることには異論がないだろう。そこで第1章では、こうした著作の代表的なものから「ザクロ (granada)」の項目の扱い方を紹介したい。

《「はじめに」の図版一覧》

【図1】セビーリャ大聖堂のスカラス礼拝堂にのこる「ザクロの聖母」像

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Virgen_de_la_Granada,_Sevilla._Andrea_della_Robbia.jpg

【図2】カトリック両王が鑄造した金貨の裏面（紋章）

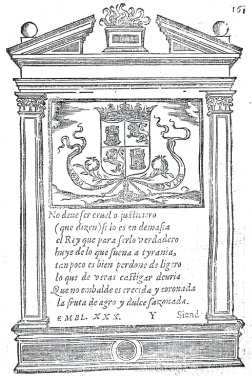
Double excelente 773942.jpg

第1章 16世紀の図像解釈

フアン・デ・オロスコ・イ・コバルピアス（1540?–1610）が1589年に著した『道徳的エンブレム』は、中世から近世初頭にかけて現れたさまざまな記章・標章の象徴的意味を解釈した書物で、現在までのところスペインで印刷出版された初めてのエンブレム集とされている。その「エンブレム30」の冒頭の挿絵（【図3】を参照）には、中央部にカスティーリャ王国を表象する城（カスティーリョ）と獅子（レオン）がクォーター（四分割）の形式で描かれた盾が置かれている。その上部には王冠が被せられていて、盾の下部には地上から伸びて左右に分岐したザクロの木が描かれている。そしてそれぞれにザクロの実がみごとに生っており、枝にはAGRO（酸っぱい）とDVLCE（甘い）の文字が刻まれている。さらにこの紋章の寓意が8行の文章で簡潔に説明されている⁽⁵⁾。

《王たる者は、あまりに苛烈な裁判官であってはならない。（世に言われるように）度を越して厳格であれば、真の王たらしとする者は、暴政を連想させる一切のものを避けるものだ。だが同時に、本来厳しく罰すべき罪を、安易に許してしまうこともまた、決して良くはない。なぜなら、酸味と甘味をあわせ持つあの果実（＝ザクロ）が、無駄に大きく育ち、王冠を戴いているわけではないのだから。》

【図 3】



オロスコ・イ・コバルビナスは、この挿絵の寓意を AGRO（酸っぱい）と DVLCE（甘い）を併せもつザクロという果物のあり方に倣って、国王のもつべき姿勢を力説している。つまり、ザクロが酸味と甘味を兼ね備えて王冠を戴くように、真の王も厳格さと慈悲を兼ね備えてこそ、その王冠にふさわしいと言うのである。

続いてオロスコはこのエンブレムの意味をさらに詳しく論じている（同著、161-163 頁）。隣国フランスのフランソワ 1 世（在位、1515-1547）は、自身の記章としてサラマンダー（火トカゲ）を採用したとして、たしかに国王は「良きものを支持し、そうでないものを壊さなければならない」のである、と述べる。しかし、国王の資質は厳格さだけを追い求めるならば、冷淡な人物にとらえられてしまう。そこでオロスコは、「酸っぱくかつ甘いという資質（el título Agro dulce）をもつザクロの記章」こそが、憎しみも蔑ろも生まず、過度でも軽微でもない処罰をくだすべき国王の象徴に適していると主張する。そしてこのザクロの記章こそが、国王エンリケ 4 世が採用したものだったと述べている。さらにオロスコは、慈悲（misericordia）と厳格さ（rigor）の巧みな使い分けは、じつは神が善を促し、悪を罰する姿勢につながると言う。

ここで言及されたエンリケ 4 世がカスティーリャ国王エンリケ 4 世であることは間違いない。第 3 章では、エンリケ 4 世のみならず、トラスタマラ家の系譜のなかで中世末から近世初めにかけてザクロの記章がいかに多用されていたかを確認したい。ところで、オロスコの兄弟で語源研究者であったセバスティアン・デ・コバルビナス（1539-1613）が著した『カスティーリャ語またはスペイン語宝典』（1611 年に刊行、【図 4】）は、語源にさかのぼって言葉がさまざまな意味をもっていたことを指摘している。同時代的な使われ方を知る上で貴重な辞書なので、その GRANADA の項目に見られる意味を以下に紹介したい⁽⁶⁾。

【図 4】



GRANADA は二つの項目に分かれている。一つ目は「王国の主都市であり有名な主邑」とあって、グラナダ王国の名称「グラナダ」そのものの語源的検討である。詳細に立ち入らないが、現在ほぼ定説のアラビア語 *Garanat*（巡礼者の丘）に由来するという説も紹介されているが、ラテン語のザクロを意味する *granatum* に由来する可能性の言及はない。二つ目は「よく知られている果物」とあり、「内部にたくさんの粒 (*granos*) をもつことからこう呼ばれるようになった」として *granatum* からスペイン語の *granada* が派生していることを裏付けている。そして一部の者がグラナダ市の名前はこの地にザクロがたくさん生えていることに由来するとするのは俗説であり受け入れがたいと述べる。また古代の人はこの果実を *Punicum* と呼んだとして、この言葉がフェニキア由来ということ、さらにはイタリア語、フランス語、カタルーニャ語での呼び方を紹介している。

続いての説明は興味深い。「ザクロはある社会 (*República*) のシンボルでありうる。そのなかで住民は満足し一体感を抱いており、支配や卓越権力 (*imperio*) を意味する王冠で飾られている。というのはザクロには先の尖った冠が上に付いているからである。」この後にザクロの飲み物などがあげられており、最後の部分がさらに興味深い。「酸っぱくかつ甘い (*agro dulce*) という銘文をもつザクロの紋章が存在しているが、これは国王エンリケ 4 世が使ったものである。その含意は、国王は正義と慈悲の両者を使い分けてすべてを行なうということである。」

こうしてザクロは、この時代には領域としてのグラナダ王国の象徴である以上に、王権と臣下の関係性、そして統治のあり方の象徴として捉えられていたことが明らかとなってきた。第 3 章、第 4 章で各地にのこる画像（紋章や印刷物、建築物の装飾など）でこのことを確認したいが、そのまえに「ザクロの聖母」について言及しておきたい。スペインのレコンキスタを完遂したカトリック両王は、ザクロに表徴される聖母マリアを崇敬していたとみなされるからである。

《第 1 章の図版一覧》

【図 3】『道徳的寓意』寓意 30 の挿絵

HOROZCO Y COVARRUBIAS, Juan de: *Emblemas morales*, Segovia, 1589, p. 161.

【図 4】『カスティーリャ語またはスペイン語宝典』の初版扉絵

Tesoro de la lengua castellana Covarrubias 1611.jpg

第2章 レコンキスタと「ザクロの聖母」

スペインでは、イスラーム勢力に対抗するなかで、キリスト教世界の擁護のために聖人が登場するエピソードには事欠かない。もっとも有名なのが聖ヤコブ（スペイン語でサンティアゴ）で、白馬に跨った聖ヤコブのおかげでキリスト教徒軍が異教徒軍に勝利するという筋書きになっており、サンティアゴ・マタモロス（モーロ人殺しの聖ヤコブ）として崇敬されたのである⁽⁷⁾。

さらに聖母マリアもまた、キリスト教徒を勝利に導く奇跡を執り成した聖人として、古くはコバドンガの戦い（722年）からたびたび登場している⁽⁸⁾。レコンキスタの最終段階に入った1487年、グラナダ王国の要所マラガの征服に手を焼いていた国王フェルナンドの夢のなかに胸元にイエスを抱えた聖母マリアが現れて、征服の遂行を強く進言したという。さらにはフランシスコ・デ・パウラが遣わした12人のミニム会士がカトリック両王の野営地に着いて、レコンキスタの完遂を助言したという。そしてマラガ征服後にはカトリック両王の援助のもとミニム会の「勝利の聖母」礼拝堂が建立され、勝利の聖母像がまつられたという⁽⁹⁾。

ここからが厄介である。グラナダ（Granada）陥落への期待のもとに聖母マリアとザクロ（granada）が描かれたとされ、スペイン＝フランドル派の絵画としてとくに有名な「カトリック両王の聖母」画（【図5】を参照）はそうした意味を内包しているという解釈が20世紀末にうちだされている。つまり聖人たちやカトリック両王と子供たちが礼拝している聖母子像の聖母マリアは、「勝利の聖母」であり、聖母の背景の衝立にある黄金のザクロは（【図6】の衝立部分）、やがてグラナダを制圧するという勝利の象徴として描かれたと主張するのである⁽¹⁰⁾。

【図5】



【図6】



「カトリック両王の聖母」画については別稿で詳しく論じたいが、ザクロ＝グラナダ王国という論拠から出発したこの解釈には、事実として無理があるといわざるをえない。というのも、イエスを抱く「ザクロの聖母 (Virgen de la Granada)」は、ナスル朝グラナダ王国の成立以前から、すなわち広くアンダルスのイスラーム勢力への対抗のなかでの出来事として現れたとされるからである。すなわち、13世紀初めに聖王フェルナンド3世がエストレマドゥーラとアンダルシア地方の再征服に着手したときから各地のキリスト教徒軍を鼓舞するかたちで出現したとされ、数々の奇跡譚を通じて「ザクロの聖母」はまさに異教徒や異端者に対する勝利の聖母として崇敬の対象になっていたからである⁽¹¹⁾。

バダホス、ウエルバ、セビーリャ、グラナダの各地の教会にはザクロの聖母像が祀られているが、典型的な伝承がリエレーナ (バダホス県) にのこされている。サンティアゴ騎士団長ドン・ペラーヨに仕えるある司祭のもとに聖母が出現して、ドン・ペラーヨにモロー人に対する揺るぎなき戦いを遂行せよと伝えるように命じて、勝利の証となるものとしてザクロを渡したというものである、そして司祭からの言葉を胸にドン・ペラーヨは戦いを躊躇わなかったという⁽¹²⁾。リエレーナのもものとされる【図7】の「ザクロの聖母」は、この奇跡譚を今に伝える13世紀の聖母子像とされ、聖母マリアは右手にザクロをもっている。

以上、中世的伝統の流れで見ると、聖母マリアとザクロが一体で描かれているからと言って、ザクロ＝グラナダ王国と推論するのは無理があることが明白であろう。先述の「カトリック両王の聖母」は、カトリック両王の保護を受けたアビラの聖トマス王立修道院に飾られ、異端審問長官を兼ねる修道院長トルケマードによるドミニコ会＝王権＝異端審問制の三位一体を謳う作品であったと捉えられる⁽¹³⁾。したがって、その中央部の聖母子の背後の衝立のザクロは、単にグラナダ王国征服を祈願していたものではなく、キリスト教会の防衛と異教徒・異端者に対する勝利という重要な意味を付与されていたと推定される。

王権にとってザクロは、「酸っぱくかつ甘い」という正しき統治技法の表徴であった (第1章) が、合わせて異教徒・異端者に対する勝利の象徴としても重要であったろう。ザクロがエンリケ4世の記章に典型的に表れたのはコバルビアス兄弟の指摘で間違いないが、15世紀を通じて、さらにカトリック両王期にもトラスタマラ家が、ザクロの記章を多用していたことが、近年の図像学的研究によって明らかになっている。次章では、王朝国家によるザクロの利用のありかたを分析したい。

【図7】



《第2章の図版一覧》

【図5】「カトリック両王の聖母」画（作者不詳，1490年代？，プラド美術館所蔵）

La Virgen de los Reyes Católicos.jpg

【図6】同部分拡大図

【図7】13世紀の作とされる聖母子像で聖母は右手にザクロをもつ。

Nuestra Señora de la Granada (Llerena).jpg

第3章 トラストマラ家とザクロの記章

これまで王権とザクロの記章の伝統的な関係については、紋章学研究の権威であったファウステイーノ・メネンデスがカトリック両王期とそれ以前との違いをあまりに強調したことによって、ほとんど看過されてきたと言ってよい。メネンデスによれば、1492年以後に紋章に含まれたザクロの記章は「ある領土の征服」、すなわちグラナダ王国の併合を表象したものであって、「中世の国王」はこうした作為を決して行わなかったと解釈したのである⁽¹⁴⁾。しかし、もっぱらレコンキスタの完了と結び付けてザクロ＝グラナダ王国とする理解は、はたして妥当なのであろうか。

近年の図像学研究は、カトリック両王期だけに焦点をあてることをせず、両王もその系譜に位置づけられるトラストマラ家について幅広く考察を加えている。そして、じつにさまざまなかたちでのザクロの表徴が活用されていたことを明らかにしている⁽¹⁵⁾。本章では、これらの研究に依拠しながら、両王以前にザクロがどのように記章として使われていたかを確認したい。

そのまえにトラストマラ家の系譜を整理しておきたい。レオン王国から独立したカスティーリャ王国では、12世紀初めにカスティーリャ＝レオン女王となったウラーカがブルゴーニュ出身のレイモンと結婚し、その間の息子アルフォンソ7世が即位しボルゴーニャ（ブルゴーニュ）朝が開始された。その死後、カスティーリャとレオンに再分裂したが、カスティーリャ・ブルゴーニャ家の系譜は続き、13世紀初めにはレオンとの恒久的統合を達成し、王朝的連続性が維持された。だが14世紀半ば、ペドロ1世に反旗を翻した異母弟のエンリケが内乱に勝利して、1369年、エンリケ2世としてトラストマラ朝を興すに至った。以後、フアン1世、エンリケ3世、フアン2世、エンリケ4世、さらにイサベル1世、フアナ1世と続いていく。エンリケ4世とイサベル1世は異母兄弟だがトラストマラ家であることに変わりはない。

一方、アラゴン連合王国（カタルーニャ、アラゴン、バレンシアからなる）では15世紀初めに、嗣子を欠いたマルティン1世が死去するとカスティーリャ王エンリケ3世の弟のフェルナンド1世が国王に選出され、やはりトラストマラ家傍系の王朝となり、アルフォンソ5世、フアン2世、そしてカトリック女王の婿であったフェルナンド2世と続いていく。

スペインを含め近世ヨーロッパの「複合君主国」（一人の君主が諸王国を緩やかに統合）が、統合原理として特定の宗教・宗派を国教とする信教国家（Confessional state）であることに加えて、特定の家門が支配王朝として連続性を担保する王朝国家（Dynastic State）であることは近年ことに指摘される場所である⁽¹⁶⁾。ただし、複合君主政的な政体や王朝の正統性・連続性の重視は、中世後期から生まれてきた現象であって、ことさらに中世と近世の断絶性を見ることはできない。

内乱を経て支配者となったカスティーリャ・トラストマラ家が、王朝の正統性・連続性を確立すべく腐心したことはいうまでもない。とくに貴族反乱に絶えず悩まされたエンリケ4世（在位、1454-74）は、カトリック両王期に先んじて国王の権威を顯示することに腐心し、エンリケが居所を構えた各地で自らの正統性を表徴する諸国紋章とザクロの記章を建物に刻ませている⁽¹⁷⁾。

それらの図像を紹介する前に、ザクロの記章に関する歴代のカスティーリャ王権の先例を見ておきた

い。ザクロが国王の記章として採用された記録としては13世紀初めのエンリケ1世に遡るようだが、その後の継承は定かでない。トラスタマラ家の第二代フアン2世（治世、1406-54）は、うろこ状の飾り（escama）を権力の表徴として重視しているが⁽¹⁸⁾、ザクロもまた紋章の装飾の一部として取り入れていたことが明らかになっている⁽¹⁹⁾。

注目されるのは、フアン2世の最初の結婚で生まれたのがエンリケ4世で、二番目の結婚で生まれたのがイサベル1世だということである。そしてイサベル1世の母親であるポルトガル王女イサベル（1428-1496）はブルゴスのミラフロレス聖母マリア修道院（カルトゥジオ会）に眠っている。そこに刻まれた紋章の盾はカスティーリャ＝レオンの紋章とポルトガルの紋章の組み合わせで、さらにその上部の王冠はザクロの連なったもので装飾されている（【図8】を参照）。やはりこの修道院に眠るフアン2世の紋章にも盾の下部にザクロが描かれており、カスティーリャ・トラスタマラ家にとってザクロの記章が大事であったことがわかる（【図9】を参照）。

【図8】



【図9】



さらにフアン1世の最初の妻との間に生まれたエンリケ4世の治世には、ザクロと王章は不可分なかたちで建物などに装飾されていく⁽²⁰⁾。【図10】は、クエリャル城（セゴビア県）に刻まれたものだが、城塞と獅子の盾の下部から左右にザクロの木が伸びている。【図11】のサン・アントニオ・エル・レアル修道院（セゴビア市郊外）の教会門に刻まれたものも同様であり、この形状は第1章で言及したオロスコ・イ・コバルビアス『道徳的エンブレム』にある挿絵と非常に似通っている。

【図 10】



【図 11】



以上、カスティーリャ・トラスタマラ家のフアン 2 世とエンリケ 4 世の時代に、カスティーリャ王国の王章とザクロの記章が、王権のプロパガンダとして使われていたことを確認した。王朝国家の流れを強めようとしたイサベルとフェルナンドは、これ以降ザクロの記章をさらに効果的に使っていくことになる。

《第 3 章の図版一覧》

【図 8】 フアン 2 世の王妃イサベル・デ・ポルトガルの紋章

GARCÍA GARRIDO, Sebastián: “La granada, símbolo de reyes y de la monarquía española”, *Boletín de Arte*, núm. 25, 2004, p. 133.

【図 9】 フアン 2 世の王章とザクロの記章

GARCÍA GARRIDO, *op. cit.*, p. 134.

【図 10】 Castillo de Cuéllar (Segovia) に描かれた紋章

<https://www.bidiso.es/Symbola/divisa/5>

【図 11】 Monasterio de San Antonio el Real の教会門の紋章

<https://www.flickr.com/photos/75710752@N04/37622032240/in/album-72157688300665173/>

第4章 カトリック両王とザクロ／グラナダ

1469年に結婚したカスティーリャのイサベルとアラゴンのフェルナンドは、1474年12月にイサベルがカスティーリャ女王に即位すると、翌年1月に「セゴビア協定」を結んで、両者の権利関係を定める⁽²¹⁾。フェルナンドは、イサベルの夫としてカスティーリャの共同統治王であることを自認し、1479年にアラゴン王となる以前の自分の印籠（スタンプ）には、この協定に基づいてカスティーリャ王国（城塞と獅子）とアラゴン連合王国（黄金地に赤の4本筋）の順に王章を並べている。加えてこの盾の左右に実のなっているザクロの木を配置しており、カスティーリャ・トラスタマラ家の「酸っぱくかつ甘い」統治技法を継承していることが明瞭である（【図12】を参照）⁽²²⁾。

【図12】



1476年にイサベル1世が王位継承戦争に勝利し、1479年にフェルナンドがアラゴン王に即位して、名実ともにカトリック両王（この肩書は1496年に教皇から授けられた称号）のスペイン共同統治が実現するが、いまだ脆弱な権力基盤のゆえに様々なプロパガンダを駆使して自分たちの王権の正統性を主張した。なかでも祭礼や葬儀、建造物の表徴、羊皮紙書物やこのころから盛んになった印刷物などに両王の共同統治の卓越さを顕在化させようとしたのである⁽²³⁾。もともとはイサベルの記章であった聖ヨハネの鷲や矢の束（*flechas*）、フェルナンドの記章であった軛（*yugo*）と「*Tanto Monta*」という銘（権力者の英断を意味する）が、いたるところに見られるようになる⁽²⁴⁾。そしてエンリケ四世の記章を継承するザクロもまた同様である。以下、代表的な例をあげておきたい。

1482年頃に描かれたとされるペドロ・マルクエリヨの『詩集』のなかの挿絵（【図13】を参照）は、グラナダ征服戦争を開始した頃のもので、10年後のグラナダ陥落への期待を表明したものとされる。詩には「神のおかげで、これらの記章はまもなくグラナダを支配し隷属させる」と書かれており、ファウスティーノ・メネンデスらの紋章学の識者は、上部の矢の束と軛、すなわちカトリック両王が下部に書かれたザクロ、すなわちなスル朝グラナダを征服する予言であると解釈してきたのである⁽²⁵⁾。一方でザクロ＝グラナダ王国を想起しつつも、他方で矢の束と軛とザクロ（トラスタマラ家を意味する）とが一体となって描かれて、カトリック両王の権威を総じて称えているとみるのも無理ではないだろう⁽²⁶⁾。ただマルクエリヨはアラゴンの下級貴族であり、カスティーリャ宮廷に及ぼす影響はほぼ皆無であった。

【図 13】



いずれにせよ、1492年のグラナダ征服後にはカスティーリャ王国のみならずアラゴン連合王国も含めた数多の重要な建物に、ザクロを含めた紋章が刻み込まれている。いくつかを例示しよう。

アラゴン王国 (Reino de Aragón) の首都サラゴースにあるアルハフェリーア宮殿は中世イスラームに起源をもつが、15世紀に大きく改築されて歴代国王の居城になった。15世紀末にフェルナンド王の命で「カトリック両王の間」がつくられるが、その入り口上部の彫刻には、カスティーリャ王国とアラゴン連合王国を構成する諸王国の紋章が刻まれた盾があり、下部にザクロの記章が彫られている (【図 14】を参照)。一般には1492年のグラナダ王国併合後につくられたもので、その重要性に鑑みて「カトリック両王の紋章に直ちに組み込まれた」とされている⁽²⁷⁾。だが、ザクロ＝グラナダ王国という理解を間違いだということはできないものの、これまでに述べたようにザクロの多重的意味を切り捨ててよいかは別問題である。

【図 14】



カスティーリャ王国の中央部に位置する古都トレードには、イサベルが王位継承戦争勝利を祈念して建てた聖ヨハネ教会がある。ムデハル様式でつくられた天井には、ザクロが無数に描かれていて、カトリック両王とザクロの関係が深かったことがわかる (【図 15】)。やはりカトリック両王が庇護者となって建立を命じたバリャドリッドの聖グレゴリオ学院の正面ファサードには、ザクロの大樹が支えるかたちでカトリック両王の紋章が刻まれている (【図 16】)。この場合、紋章下部のザクロが領域としてのグラナダ王国だけを表徴しているのかは定かでないが、両王にとってザクロがもつ重要性をはっきりと示している。

【図 15】

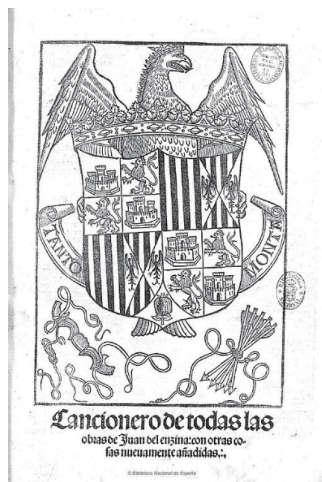


【図 16】



すでに「はじめに」の【図 2】で示したように、カトリック両王の図像学的プロパガンダは、建造物に留まらず、貨幣や書物挿絵におよんでいる。1497 年の貨幣と同じような図像は、1496 年に出版されたファン・デル・エンシーナの『詩集』に見ることができる（【図 17】を参照）。

【図 17】



これらからは、ザクロ＝グラナダ王国という単一的解釈を引き出すこともできようが、同時代のほかの図版には、それだけでは解釈できないものが存在する。カルロ・ヴェラルディのフェルナンド王を称える書物の図版には、同王が右手にはカスティーリャ王国の紋章の盾をもち、左手には八つものザクロが描かれた盾をもっている（【図 18】）。これらのザクロがなにを表徴するかを判断するのは難しい。さらに、1497 年頃に著されたと推定される作者不詳『救いのための覚書』には、盾の下部にはザクロは描かれていないが、盾の周囲にザクロの木と実が溢れている（【図 19】）。

【図 18】



【図 19】



以上、カトリック両王の時代には、数多の図像にザクロが描かれているが、1492年のグラナダ征服以後に作られたものでもザクロ＝グラナダ王国と同一視することはできないのである。王朝国家への志向と領土的拡大の強調とのあいだで、図像の使い方は揺れ動いたのかもしれない。カトリック両王の三女カタリーナ（キャサリン・オブ・アラゴン）がイングランドに嫁いだときには、その記章としてザクロを選んでいった。そして嫁ぎ先でのキャサリンのバッジとしてバラとザクロを半分ずつ合わせたものがつくられている（【図 20】）。もちろんバラはテューダー家を表徴し、ザクロはグラナダ王国ではなくてトラスタマラ家を表徴している。この時期のザクロの記章には多重的解釈が求められるのである。

【図 20】



《第 4 章の図版一覧》

【図 12】 イサベルとの共同統治王でアラゴン王子の印籠（1474～1479 年の間のもの）

MONTANER FRUTOS, op. cit., p. 147 に所収。

【図 13】 ペドロ・マルクエリョ『詩集』の挿絵

<https://www.meisterdrucke.us/fine-art-prints/Unknown-artist/950861/Motto-of-Catholic-Kings-Emblem-of-Catholic-Kings-Miniature-in-%27Devocionario-de-la-Reyna-Da-Juana-a-Quien-Llamaron-la-Loca%27-by-Pedro-Marcuello.html>

【図 14】 アルハフェリーア宮殿カトリック両王の間入り口上部の紋章

Arco principal palacio RRCC.jpg

【図 15】 トレードの聖ヨハネ修道院のムデハル様式の天井

Monasterio de San Juan de los Reyes, Toledo 07.jpg

【図 16】 バリャドリードの聖グレゴリオ学院の正面ファサード

Valladolid San Gregorio 20080815.jpg

【図 17】 ENZINA, Juan del: *Cancionero*, 1496 の扉絵

【図 18】 VERARDI, Carlo: *In laudem Serenissimi Ferdinandi Hispania[rum] regis Bethicae & regni Granatae obsidio, victoria, & triu[m]phus*, 1494 の扉絵

【図 19】 *Memoria de nuestra redención*, 1497 の挿絵

【図 20】 カタリーナ（キャサリン）のバッジ

GARCÍA GARRIDO, *op. cit.*, p. 144.

おわりに——ザクロの図像学的継承

ここまでで検討したように、ザクロは中世後期には多義的な意味を付与されていた。とくにスペインの場合には、キリスト教的図像学の表徴的意味をもつばかりかイスラームに対するレコンキスタのなかで聖母マリアとザクロというかたちで、異教・異端に対するキリスト教徒の勝利という意味を与えられていた。さらに 15 世紀にはトラスタマラ家が王朝国家を志向するなかで、この果実は王権の統治技法の象徴となったのである。

カトリック両王は、ユダヤ教徒とイスラーム教徒を追放し、キリスト教への改宗に疑いのある者たちを裁くための異端審問制を確立してカトリックの信教国家（Estado confessional）の土台を築いたが、近世国家のもう一つのかなめである王朝国家の道は、歴史のいたずらによって屈折することになった。5 人の子供のうち王位継承権をもつことになった次女フアナは神聖ローマ皇帝の息子フィリップに嫁いでいたが、精神疾患のゆえにスペイン王位の継承権をその息子カールに譲る結果になってしまったからである。つまり法的にはフアナがフアナ 1 世として 1555 年に亡くなるまで地位を保全していたが、1516 年にはハプスブルク家のカールがカルロス 1 世として即位宣言してしまい、事実上はトラスタマラ朝は途絶えて、新たにハプスブルク朝が始まった⁽²⁸⁾。

繰り返すが、ザクロはトラスタマラ家（酸っぱくかつ甘い統治を是としていた）とグラナダ（イスラームを放逐したかつてのグラナダ王国の領土）の二重の意味を付与されていた。第 1 章で述べたように、16 世紀後半までザクロには統治上の図像学的意味が残されていた。だが神聖ローマ皇帝ともなったカルロス 1 世にとって、トラスタマラ家を正統化する記章は不要になったのである。いやむしろハプスブルク家に王朝が交代することで、その意味を捨象することになり、ザクロの記章はもっぱら広範囲にわたる領土の一つたるグラナダを指すだけになったのである。カトリック両王の遺骸がおさめられたグラナダ大聖堂に刻まれた二つの紋章の違いは、この歴史の変遷を物語ってくれる。

【図 21】 は、イサベル死後にフェルナンドが作らせたものと想定される。というのもイサベル存命中のように盾の下部先端にザクロが描かれているのと同時に、1504 年にスペイン帰属が確定したナポリ王国の記章、さらに 1515 年に帰属が確定したナバーラ王国の記章が盾の内部に刻まれているからである。新たな二つの記章が含まれつつも、イサベル存命中のものと同じように、ザクロの記章が際立っていることが明白である。したがって、このザクロを王国に併合されたグラナダ王国の意味だけに理解するのは正しくない。

【図 21】



ところが同じ大聖堂のもう一つの紋章【図 22】には、1516 年にスペイン国王となり、1519 年に神聖ローマ皇帝に選出されたカルロス 1 世の盾が刻まれているが、内部には父方から継承したブルゴーニュなどの記章があらたに含まれるだけでなく、ザクロの記章はスペインの諸王国のなかにふくまれている。繰り返すが、全体の盾からすれば、スペイン・ハプスブルク家の治める諸王国の小さな一つにすぎなくなっているのである。この様式は、続くフェリーペ 2 世からカルロス 2 世までのスペイン帝国の紋章として維持されることになり、ザクロからトラスタマラ王朝の伝統を想起することはできない。ときにザクロが盾のほぼ中央に位置するも、そのサイズは極めて小さい。別稿で検討したいが、18 世紀初めにブルボン王朝の支配になって紋章のデザインには変更が加わる。だが、ザクロ自体がカトリック両王期のように目立つかたちで据えられることはない。

【図 22】



興味深いことに、近世を通じた王朝国家のあり方が解体してほとんどの海外領土を喪失したスペインが、19 世紀に国民国家を志向するとき、スペインの国章に刻まれる諸国はカスティーリャ＝レオン、アラゴン、ナバーラ、そしてグラナダのみとなり、かつてのグラナダ王国を意味するザクロはいやがおうにも目立つかたちになるのである。それはちょうどカトリック両王期の紋章に似通ってしまうが、も

はや誰もザクロからトラスタマラ家の王朝的伝統を想うことはない。そして 19 世紀半ばからのスペイン国民史学でカトリック両王によるレコンキスタの完遂の偉業が称えられると、ザクロ＝グラナダ王国という単一的意味は定着してしまった。

本稿「はじめに」で指摘したように、現在もなお、スペイン国章の形状はカトリック両王期のそれと似通っており、そのことが 15 世紀から 16 世紀初めにザクロの表徴が多様性をもったことの理解を妨げていると考えられる。本稿が、そうした通説と常識に対するささやかな批判として読まれたとすれば、幸いである。

《「おわりに」の図版一覧》

【図 21】グラナダ大聖堂の壁面に飾られたカトリック両王の紋章

<https://esculturayarte.com/025261/Catedral-Escudo-de-los-Reyes-Catolicos-en-Granada.html>

【図 22】グラナダ大聖堂の壁面に飾られたカルロス 1 世の紋章

Escudo de Carlos I de España, Granada.jpg

注

- (1) マドリード・コンプルテンセ大学の HP サイトには、中世図像学データベース (Base de datos digital de Iconografía Medieval) があり (<https://www.ucm.es/bdiconografiamedieval/>)、コルーニャ大学の HP サイトには、SYMBOLA と題する中近世図像学データベースがあつて (<https://www.bidiso.es/Symbola/>)、それぞれに充実している。これらのサイトの “granada” の項目検索によって、ザクロにはじつに多義的な意味が付与されてきたことがわかる。以下の叙述に関しては、基本的に両サイトからの情報に依拠した。
- (2) <https://www.archisevilla.org/virgen-de-la-granada-catedral-de-sevilla/> を参照。左側に聖フランシスコ (アシジのフランチェスコ) と聖ドミンゴ (グスマンのドミニコ)、右側に聖セバスティアヌスと聖カシルダを従えたこの聖母子像は、16 世紀から 17 世紀にかけて活躍したセビーリャの「ザクロの信徒会 (la Congregación de la Granada)」の「無原罪の御宿り」信奉の拠り所となった。神秘主義的潮流とマリア崇敬の問題は別稿で扱いたい。
- (3) なおグラナダを支配したイスラームのナスル朝 (1238–1491) は、決してザクロを紋章に取り込んでいなかったことに注意したい。花模様の真ん中の盾には「アッラー以外に勝利者はいない」とアラビア語で刻まれていた。ザクロがナスル朝を継承する意味を持たないことは重要である。GARCÍA GARRIDO, Sebastián: “La granada, símbolo de reyes y de la monarquía española”, *Boletín de Arte*, núm. 25, 2004, pp. 138–139 を参照。
- (4) 現代スペインの国章については、拙稿「スペインのカトリック両王と《 Tanto Monta 》(その 1)」, 神奈川大学人文学研究所報 74 号 (2025 年 9 月), 144–148 頁を参照されたい。
- (5) HOROZCO Y COVARRUBIAS, Juan de: *Emblemas morales*, Segovia: Impreso por Iuan de la Cuesta, 1589. ザクロの項目は、同著の libro III, emb. 30 にあたる。
- (6) COVARRUBIAS, Sebastián de: *Tesoro de la lengua castellana o española*, Madrid: Luis Sánchez, impresor, 1611.
- (7) スペインの聖ヤコブ崇敬については、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼の問題と絡んで、日本でもかなり研究が進んでいる。差し当たり、田辺加恵ほか著『聖ヤコブ崇敬とサンティアゴ巡礼』春風社、2022 年を参照。
- (8) コバドンガの戦いの伝承については、拙稿「コバドンガの戦いと『レコンキスタ』の創造」、立石博高・内村俊太編著『スペインの歴史を知るための 50 章』(明石書店、2016 年), 66–68 頁を参照。
- (9) この経緯については、ROMERO TORRES, José Luis: “Iconografía de la Virgen de la Victoria en Andalucía. De la escultura religiosa a la imagen devocional”, en *Los mínimos en Andalucía: IV Centenario de la fundación del Convento de Nuestra Señora de la Victoria de Vera (Almería)*, Almería: Instituto de Estudios Almerienses, 2006, pp. 497–538 を参照。この聖母像は現在は勝利の聖母マリア大教会に祀られているが、作者不詳とされ、ドイツ皇帝マクシミリアン 1 世がフェルナンド 1 世に贈ったという説の信憑性は低い。
- (10) YARZA LUACES, Joaquín: *Los Reyes Católicos. Paisaje artístico de una monarquía*, Madrid: NEREA, 1993,

- pp. 22-24, 34-41 を参照。Yarza の研究に依拠した邦語文献に、原陽子「『カトリック両王の聖母子像』と勝利の聖母——その制作意図と図像解釈——」、『姫路独協大学外国語学部紀要』, 19 号, 2006 年, 229-247 頁がある。
- (11) 聖王フェルナンド 3 世は、「大レコンキスタ」を進めたことで有名だが、ムスリムという異教徒に挑んだだけでなく、北部パレンシアなどでカタリ派とされる異端者に厳罰で臨んだことでも知られる。したがって、聖ドミニコと並んでスペイン異端審問制の始祖として近世まで崇められていた。この国王の治世に「ザクロの聖母」の奇跡譚が現われたのは偶然ではないだろう。SCHOLZ-HÄNSEL, Michael: “Propaganda de imágenes al servicio de la Inquisición. El Auto de Fe de Pedro Berruguete en el contexto de su tiempo”, *Norba: Revista de arte*, núm. 12, 1992, pp. 67-82 を参照。
- (12) MONTEO SANTARÉN, Eulogio: *Monografía histórico-descriptiva de la ciudad de Llerena*, Llerena: Centro de Iniciativas y Turismo de Llerena, 1900, p. 33-35 を参照。そのほかの伝承については、差し当たり、es. wikipedia.org の項目 “Virgen de la Granada (advocación)” を見られたい。
- (13) この作品の美術史的・歴史的研究は枚挙にいとまがないし、さまざまな解釈がなされてきた。最近の成果として、CABALLERO ESCAMILLA, Sonia: *Las imágenes como instrumento de evangelización y condena: Torquemada y el Convento de Santo Tomás de Ávila*, Madrid: Fundación Universitaria Española, 2014 があり、こうした結論を導いている。
- (14) MENÉNDEZ PIDAL DE NAVACÚES, Faustino: “El escudo”, en VV. AA.: *Símbolos de España*, Madrid, Centro de Estudios Políticos y Constitucionales, 2000, pp. 15-225.
- (15) 代表的な研究を列举しておく。GARCÍA GARRIDO, *op. cit.*, pp. 127-148; CHAO CASTRO, David: *Iconografía regia en la Castilla de los Trastámara*, Tesis, Universidad de Santiago de Compostela, 2005; VILLASEÑOR SEBASTIÁN, Fernando: *Iconografía marginal en Castilla, 1454-1492*, Madrid: CSIC, 2009; FERNÁNDEZ DE CORDOVA MIRALLES, Álvaro: “Las divisas del rey: escamas y ristes en la corte de Juan II de Castilla”, *Reales Sitios*, núm. 191, 2012, pp. 22-37; LÓPEZ POZA, Sagrario: “Empresas o divisas de Isabel de Castilla y Fernando de Aragón (los Reyes Católicos)”, *Janus. Estudios sobre el Siglo de Oro*, 1, 2012, pp. 1-38; Idem, “La divisa de las granadas del rey Enrique IV de Castilla y su estela posterior”, *IMAGO. Revista de Emblemática y Cultura Visual*, núm. 6, 2014, pp. 81-95; MONTANER FRUTOS, Alberto: *El señal del rey de Aragón: Historia y significado*, Zaragoza: Institución Fernando el Católico, 2013.
- (16) 最新の成果に、GEEVERS, Liesbeth; GUSTAFSSON, Harald (eds.): *Dynasties and State Formation in Early Modern Europe*, Amsterdam University Press, 2023 がある。拙著『スペイン史 10 講』(岩波新書, 2021 年) の第 4 講・第 5 講は、「複合君主政」という理解に立ってスペイン近世を概観している。
- (17) LÓPEZ POZA, 2014, *op. cit.* を参照。なお、エンリケ 4 世の娘フアナの王位継承を支持したフアナ派を抑えるために異母妹のイサベル 1 世の支持派は、フアナがエンリケの実の娘ではないというエンリケ「不能王」説をもちだしてイサベルの王位継承を正統化しようとした。次章でみるようにトラスタマラ家の正しき継承者であると主張したわけで、ザクロの記章を大いに活用することになる。エンリケ 4 世の統治と貴族層との対立については、王権の絶対主義志向という枠組みで、近年見直しが進んでいる。GONZÁLEZ NIETO, Diego, “El conflicto monarquía-nobleza en el reinado de Enrique IV de Castilla (1454-1474): motivos últimos para oponerse al rey”, *Ab Initio*, Núm. 11 (2015), pp. 51-88 を参照。
- (18) FERNÁNDEZ DE CORDOVA MIRALLES, *op. cit.*, p. 22.
- (19) GARCÍA GARRIDO, *op. cit.*, pp. 132-133.
- (20) その代表的な建物の所在については、<https://www.bidiso.es/Symbola/divisa/5> を参照。
- (21) この協定については、SUÁREZ, Luis: *Fernando el Católico*, Barcelona: Ariel, 2013, pp. 47-50 を参照。
- (22) MONTANER FRUTOS, *op. cit.*, p. 147 の指摘による。残念ながら現時点では、トラスタマラ家の傍系で即位したフェルナンド 1 世からフアン 2 世までのアラゴン歴代国王のザクロの記章の扱い方は不明である。
- (23) NIETO SORIA, José Manuel (dir.): *Orígenes de la monarquía hispánica: propaganda y legitimación (ca. 1400-1520)*, Madrid: Dykinson, 1999 の諸論考を参照。とくに美術的表象については、同著所収の PÉREZ MONZÓN, Olga et al.: “Las manifestaciones artísticas”, *ibidem*, pp. 341-370 を見られたい。こうした美術的表象と絡んでカトリック両王の卓越さを称える著作物については、CARRASCO MANCHADO, Ana Isabel, “El «Armorial Moralizado» de Antonio García de Villalpando: Heráldica y propaganda de los Reyes Católicos”, *En la Es-*

paña medieval, N.º Extra 1 (2006), pp. 113-130 を参照。

- (24) このことについては、筆者が研究ノート「スペインのカトリック両王と《Tanto Monta》」を本誌『人文学所報』に執筆中で、第 74 号と第 75 号に前半部分を掲載している。
- (25) MENÉNDEZ PIDAL DE NAVACÚES, *op. cit.*, pp. 172-174; WEISSBERGER, BarbaraF: "Patronage and politics in the court of the Catholic Monarchs: the Cancionero de Pedro Marcuello", *Studies in Iconography*, 26 (2005), pp. 183-184 を参照。
- (26) MARÍN PINA, María Carmen: "Composición y cronología del *Cancionero* de Pedro Marcuello", *Archivo de filología aragonesa*, vol. 44-45 (1990), p. 170 では、ザクロ＝グラナダ王国という明示的な断定を避けている。また GARCÍA GARRIDO, *op. cit.*, p. 135 では、ザクロは王家の記章として描かれていると捉える。
- (27) 例えば、POZO FELGUERA, Gabriel: "Granada en el Escudo de España, el Escudo real en Granada", (<https://www.elindependientedegranada.es/cultura/granada-escudo-espana-escudo-real-granada>) を参照。
- (28) ただしカールは、母フアナからスペイン王族の血筋を受け継いだことを重視している。カールの国王修史官オカンポは、この王族の始祖がヘラクレスであるとした系譜図を創り、ヘラクレスの血が西ゴート王、アストゥリアス王、そしてトラスタマラ家諸王へと繋がることを強調した。カールが採用した記章 "Plus Ultra" は、そうした血筋の連続性の表徴であった。差し当たり、CIROT, Georges: "Florián de Ocampo, chroniste de Charles Quint", *Bulletin Hispanique*, t. XVI (1914), pp. 307-336 を参照。

The Catholic Monarchs and the Iconography of the Pomegranate: Between the Symbol *Granada* and the Kingdom of *Granada*

TATEISHI Hirotaka

Abstract

From antiquity through the Middle Ages and into the early modern period, the pomegranate has embodied various symbolic meanings. While its form naturally made it a symbol of fertility and abundance, it took on a particular significance in Christian art: because of its numerous internal seeds, it came to represent the Church uniting a multitude of believers.

What should be noted here is that in medieval Spain, the Virgin of the Pomegranate and the symbolism of the fruit itself took on an additional layer of meaning in connection with the progress of the Reconquista against Islamic forces. First, there is a tradition in which the Virgin Mary appears as a patron protecting the achievements of the royalty and nobility advancing the Reconquista; I will discuss this theme in Chapter 2. Second, apart from its ecclesiastical meaning, the pomegranate came to be used as a symbol of the art of governance, specifically appearing as the emblem (*divisa*) of Enrique IV (r. 1454–74) of the Trastámara dynasty of Castile. It is confirmed that his half-sister, Isabella I (r. 1474–1504), and her husband, Ferdinand II of Aragon—who was also of the House of Trastámara—inherited this tradition. This issue, often overlooked in the prevailing theories of Spanish national historiography, will be addressed in Chapters 3 and 4.

Third, since “Granada,” the Nasrid Kingdom that fell in 1492, happens to be the same word as “pomegranate” (*granada*), there is a problematic tendency to simply interpret the pomegranate depicted at the bottom of the royal coat of arms of Isabella and Ferdinand (the Catholic Monarchs) as a symbol of the Kingdom of Granada. I intend to deal with this in the latter half of Chapter 4 and the “Conclusion.”

There will likely be no objection to the premise that nearly contemporary iconographic interpretations serve as the starting point for developing these arguments. Therefore, in Chapter 1, I will examine how the entry for the “pomegranate” (*granada*) is treated in representative works of the period.

[Keywords]

The Catholic Monarchs, Iconography of the Pomegranate, Kingdom of Granada,
the emblem of the Trastámara dynasty, symbol of the art of governance